

野鳥たより

—北海道—

ISSN 0910-2396

第 115 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成11年3月21日

オオハクガン



1994. 4. 18 北村 撮影者 長谷川 富 昭

〒073-0034 滝川市空知町1丁目3-1



もくじ

私の探鳥地 (35) 冬こそ道北!	正田 英子	2
WILD LIFE ART	増田 寿志	3
利尻発「ウミネコをめぐるいろいろなこと」	小杉 和樹	4
鵜川河口は今	山下 茂	7
都市公園で秋の小鳥の渡りを見る～札幌市豊平公園にて～	佐藤ひろみ	8
野鳥記録二題	北山 政人	10
新年野鳥講演会「島の鳥たち」	講師 マーク・ブラジル	12
探鳥会ほうこく		13
鳥民だより		15
探鳥会案内		16

私の探鳥地 (35)

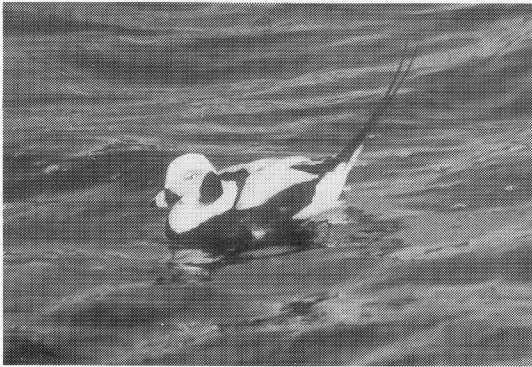
冬こそ道北!

正田 英子 (文・写真とも)

私は最北の街の稚内に住んでいるのですが、道北は範囲が広く季節により鳥によりフィールドは異なり、またその数も多いのです。何処も私にとっては、とっておきのフィールドばかりです。

コオリガモ

その中の一つ稚内ならではのコオリガモの越冬場所を紹介しましょう。コオリガモを一度に300羽も見ることが出来るのは日本では稚内だけ…と言われていました。毎年11月の下旬になると、毎日30羽前後の群れで渡って来ます。そして12月上旬には300羽ほどになり、港はア、アオナ ア、アオナと鳴く声でいっぱいになります。

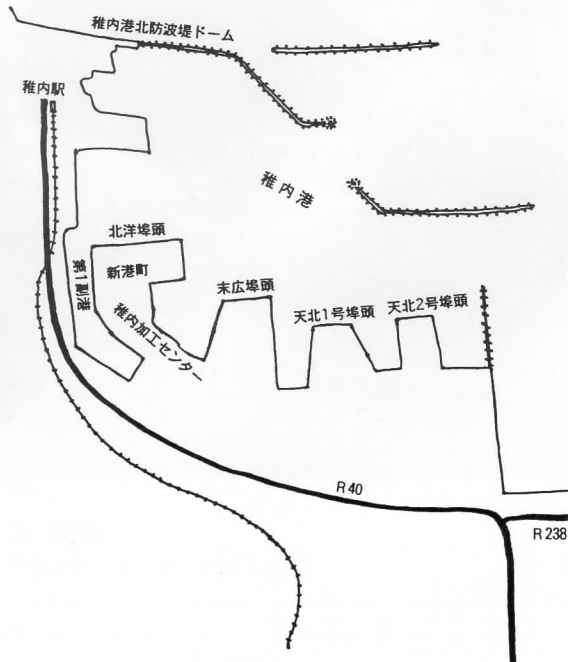


コオリガモ

この鳴き声は、最北の街に本格的な冬の到来を告げるものです。稚内の海岸では割と何処でも見ることは出来るのですが、一番多いのは第一副港と北洋埠頭です。その他、シノリガモ、クロガモ、ヒメウ、ウミアイサ、ホオジロガモ、スズガモ、ケイマフリ、ハシブトウミガラなども港内で見ることができます。

稚内港はほとんど、流水が来たり結氷したりしません。漁船の出入りのたびに港内にいた鳥たちは慌てて飛び立ちます。でもまたいつの間にか戻って来ています。あまりないなあ…と感じた時は、きっと漁船の出入りに驚いて外海に出て行ったのだと思って下さい。少し待っていると必ず戻って来ます。

第一副港の一部だけ結氷するところがあるのですが、その上でオジロワシ、オオワシを見ることができます。近くの加工センターからトラックで荷運びされる時にこ



ほれ落ちた魚を拾って（王者の風格も台無しなのですが…）食べています。至近距離で見られるところが魅力ですね。加工センターが休みの日は彼等も休み！と言う事です。コオリガモの観察期間は11月下旬～3月下旬までです。3月下旬にはもう夏羽になりつつあるコオリガモを見ることが出来ます。

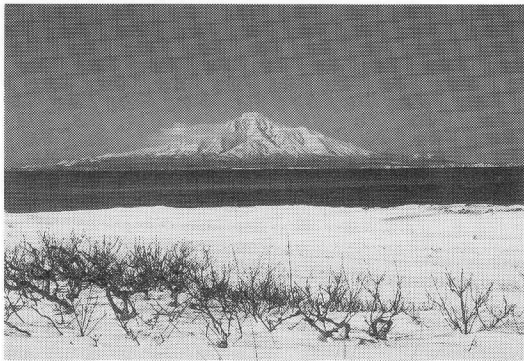
観察する時は漁業の仕事をしている人達の邪魔にならないように注意して下さい。

猛禽道路

もう一つ。抜海から天塩までの道々106号線を私たちは猛禽道路と呼んでいるのですが、春、夏は花も美しくエゾカンゾウやエゾスカシユリが咲き誇り、秋はススキも見事

です。その中で、ノビタキ、オオジュリン、キマユツメナガセキレイ、ホオアカ、シマアオジ、ノゴマ、コヨシキリ、ノスリ、チュウビ、ミサゴは必ず見られます。（言い切っているのかしら？）これらは繁殖も確認しています。

この道は何と言っても猛禽が多くなる冬が一番です。



冬の利尻富士

オジロワシ、オオワシ、ケアシノスリ、コミミズク、コチョウゲンボウ、チョウゲンボウ、運がよければ…シロハヤブサヤシロフクロウにも出会うことが出来ます。日本海の荒波の上には雪の利尻富士がそびえています。このロケーションの素晴らしさはつい自慢したくなってしま

います。オイシイ話ばかりで申し訳ありません。あくまでも運がよければ…です。

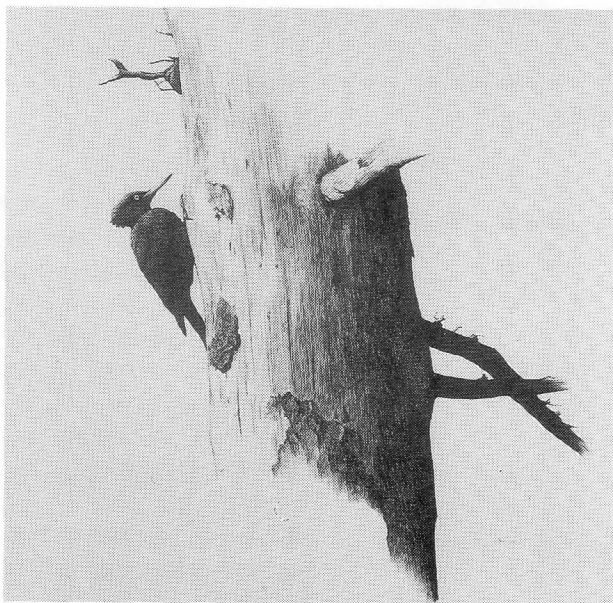
自家用車で移動しながらの観察がよいでしょう（約70kmあります）。貸切道路のようで快適なのですがなにしる海沿いは吹雪きやすいので気を付けて下さい。遭難する可能性もあります。（ホントですよ！）

おまけですが…抜海港には

ゴマフアザラシが150頭ぐらい越冬しています。たまには、アビ、ハジロカイツブリ、ミミカイツブリがいるのでよく観察して下さい。106号線は猛禽ばかりではなくエゾシカやキタキツネにも出会うワクワク道路なのです。冬こそ道北！

〒097-0011 稚内市はまなす1丁目6-10

WILD LIFE ART 増田 寿志



Black Woodpecker. クマゲラ

〒061-1131 北広島市三沢1丁目11-19

コーポウエストH号室

「ウミネコをめぐるいろいろなこと」

～たかがウミネコ？ されどウミネコ～

小杉和樹（利尻島自然情報センター主宰）

ウミネコという鳥

ウミネコは学名 *Larus crassirostris* といひ「海鳥で太いくちばし」を意味します。英名では black-tailed gull、文字どおりの「尾の黒いカモメ」ということで、中国でも「黒尾鷗」の名前がつけられていますから、この鳥の特徴は尾の先の黒帯模様なのでしょう。でも、日本のウミネコは「海猫」で、鳴き声が猫のものに似ているからとのことですが、視覚ではなく聴覚での認識は興味深いものです。また、分布は日本、朝鮮半島、沿海州と狭いことから、Japanese gull とも呼ばれています。

何が起きているの

突然、利尻島西部の牧場にコロニーが形成される以前は、北部に小規模なコロニーがあるだけでした（図1）。

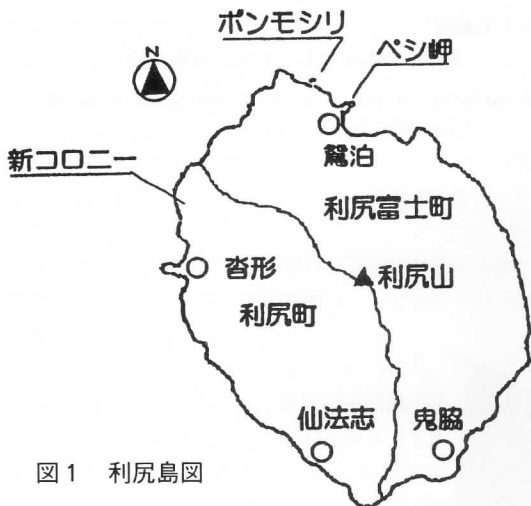


図1 利尻島図

「灯台の崖（ベシ岬）でウミネコ多少繁殖し卵も採られたこともあるという（港には20羽内外を見る）が今回は確証がなかった。」の報告（1965年6月、黒田長久氏）や、「ベシ岬でウミネコ成鳥480羽の観察と繁殖を確認。」という報告（1979年7月、早稲田大学生物同好会）からも、利尻島のウミネコは近年になって増加したことが伺えます。

1988年、急速にその規模と範囲を拡大したコロニーは、成鳥約8,000羽、営巣数1,000巣という状況でした。そして、その年から「ゴミ被害」と言われる糞害や漁業被害

が地元住民から叫ばれ、1989年にはコロニー形成への妨害をするため「防鳥テープ」、「野焼き」などを行いました。効果がありませんでした。

1990年以降、コロニーの規模はさらに拡大し、成鳥数2万羽とも3万羽とも言われるようになりました。現在は妨害のために古魚網を地上1m程の高さに設置したことにより、核になっていた牧場付近から利尻富士町との境界近くの北側に移動し、1998年には密度が薄く、数も少なく感じられるものでした。後述する「ウミネコ等被害対策検討委員会」による調査でも営巣数は7,900巣、繁殖成鳥数15,800羽と推定されました。

何が問題なの

簡単にいうと、コロニーが民家に近く、朝夕に群舞しながらの鳴き声はうるさく、家の屋根にとまっては糞で屋根を白くしたかと思えば、飛びながら糞を車や洗濯物に落とす。そればかりか、漁師の虎の子であるウニまでも食べるという傍若無人な振る舞いをするゴミ（カモメ類を総称して漁業者はこう呼びます）はとんでもない存在であるということ。

このウニの被害額は高額で、根拠はウミネコが1日1個のウニを食害するとして、渡来羽数にウニ1個当たりの単価をかけ、さらに漁期の日数をかけるというもので、成鳥15,000羽×1個×85.8円×100日＝1億2千9百万円というものです。これは1997年の利尻町のウニ水揚高4億1千8百万円の3割に相当します。

しかし、昨年と今年行った利尻島自然情報センターの「胃の内容物調査」や検討委員会の観察からもウミネコがウニを食しているという事実は確認されませんでした。ただし、オオセグロカモメではキタムラサキウニを食しているのが確認されました。このことから安直にウミネコがウニを食害しないとは断定できるものではありませんが、漁業者が「ゴミがウニを食べている」と力説しているのはオオセグロカモメが食害しているものと推測されます。とすれば、対策を講じなければならないのはオオセグロカモメ？

でっ、どうするの

そこで、この状況を何とかしようと北海道庁は1998年、道東のエゾシカ問題と同レベルで道北の「ウミネコ問題」として「ウミネコ等被害対策検討委員会」を設置したの

です。ウミネコ問題が顕在化した1988年に近視眼的な駆除や対策ではなく、広域的に基本的な調査をしなければ解決しないと言いつけて10年が経過しましたが、まだ遅過ぎはしないでしょう。きっと……。

委員長に北大水産学部小城春雄教授、委員に同農学部綿貫豊助教授、羽幌町海鳥センター小野宏治研究員などがメンバーとなり、委員の外にオブザーバーなど含めると総勢50名弱の組織となりました。委員会ではコロニー現況、生息状況、天敵、卵破損等影響、餌資源、住民意識等の調査を行い、委員会とは別に北海道庁空港港湾課では利尻空港ジェット化の際のウミネコ等とのバードストライク防止のための調査をしています。

拡大と移動

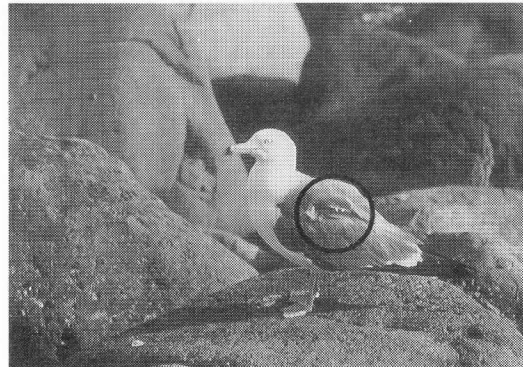
既存の北部海岸域のコロニーに大きな環境の変化があったとは思えませんが、オオセグロカモメの侵入が増えた様な気がします。ただし、新たにコロニーが形成された牧場は北海道本土に見られる平坦で牧歌的な環境ではなく、溶岩流が露出し、イネ科の草本が繁茂する環境は海岸の断崖的な環境と似ており、好条件であったのかもしれない。

また、コロニーが急速に拡大した状況は、利尻島内の個体が移動しただけではないことは明白でした。それは時間を待たずに、北海道北部のコロニー間を移動している事実が標識リングにより確認され、利尻島以外の繁殖個体がコロニーの拡大に関与していることが判明しました。

当時、北海道北部には天売島と枝幸町目梨泊の2箇所

が知られていましたが、天売島では野良猫、枝幸町目梨泊ではキタキツネが雛を捕食するなどして、どちらのコロニーも荒れている状況にあり、環境が悪化している他地域のコロニーの個体が利尻島に移動して拡大を急速なものにしたと考えてもよいでしょう。

特に1998年は、ウミネコ900羽が有害鳥獣として駆除され、その中の13個体と保護等により確認された4例合わせて17例の標識鳥が確認されました(表1)。内訳は、枝幸町目梨泊産が8個体、天売島産が4個体、利尻島産が5個体でした。この中で、天売島で放鳥された090-71900の個体は、21年を経過するという長寿であったこともわかりました。



翼にウィングタグが付いている

表1 標識鳥データ

足環番号	再捕獲月日	メ	モ	初放鳥月日	放鳥場所
09A-16100	1998. 6. 4	保護後放鳥		1991. 7. 3	利尻島
092-43683	1998. 6. 4	死体拾得		1985. 6. 30	枝幸町
092-43190	1998. 6. 14	駆除		1985. 6. 29	枝幸町
090-71900	1998. 6. 14	死体拾得		1977. 7. 4	天売島
09A-29885	1998. 6. 14	駆除		1993. 7. 3	利尻島
09A-16250	1998. 6. 15	駆除		1991. 7. 3	利尻島
092-44128	1998. 6. 15	駆除		1985. 7. 11	枝幸町
09A-37029	1998. 6. 15	駆除		1994. 5. 24	天売島
092-44228	1998. 6. 15	駆除		1985. 7. 11	枝幸町
092-43146	1998. 6. 16	駆除		1986. 6. 29	枝幸町
090-94951	1998. 6. 17	駆除		1986. 6. 29	天売島
09A-16228	1998. 6. 17	駆除		1991. 7. 3	利尻島
090-83816	1998. 6. 18	駆除		1981. 6. 20	枝幸町
090-89297	1998. 6. 18	駆除		1979. 7. 22	枝幸町
09A-16029	1998. 6. 18	駆除		1990. 6. 30	利尻島
092-43796	1998. 6. 18	駆除		1986. 7. 9	枝幸町
090-94697	1998. 6. 19	駆除		1986. 6. 29	天売島

マーキング調査

さらには1998年は、マーキングによる移動の調査も行いました。天売島（黄色リング、100羽）と枝幸町目梨泊（緑色リング、100羽）で雛へのカラーリングによるマーキング、さらに利尻島（赤色リング、200羽）では成鳥へのウイングタグ（緑色、50羽）によるマーキングも併用して調査を行いました（図2）。

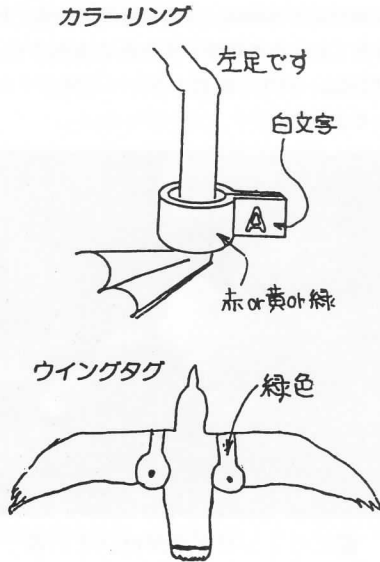


図2 マーキング

これまでに10数例の観察が寄せられ、繁殖地からの若鳥と成鳥の移動の一部（図3）が見えてきました。放鳥数がまだ少なく、観察例も少ないものですが、カラーリングによるこのマーキング調査は今後も継続する予定ですので、1998年放鳥分も含めて皆様の観察をお願いします。

おわりに

これまでの観察や調査から得てきた事項は、ウミネコについてのほんの少しのことです。委員会では1999年以降、天売島と枝幸町目梨泊のコロニーについても総合的な調査をし、その生息地の保全をして、一箇所に集中したウミネコを分散させることも検討し



ヒナへのバンディング

ています。そして、利尻島では暫定的な対策として、前年と同数の有害鳥獣駆除と現コロニー付近をゾーン別に保護管理をするべく進んでいます。

いま、利尻島で起きている“ウミネコ問題”は、渡りをする鳥類であるということからも一地域だけの問題ではなく、これからのわたしたち人間と野生生物との関係についてを模索する取り組みに他ならないのだと思っています。

〒097-0401 利尻郡利尻町杓形字富士見町

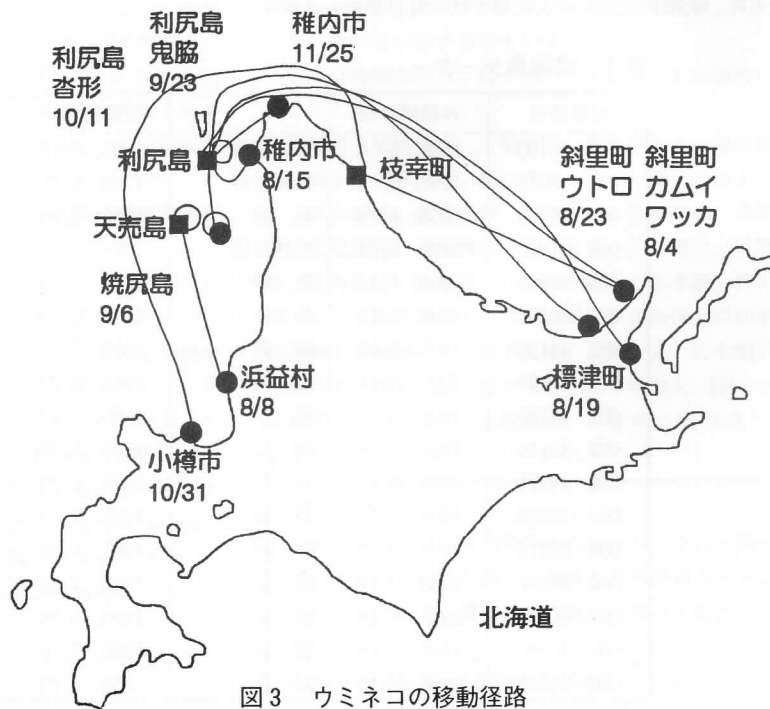


図3 ウミネコの移動径路

鵜川河口は今

山下 茂 (ネイチャー研究会 in むかわ)

鵜川河口に飛来するシギ・チドリが年々減少しています。河口の干潟が縮小しているためです。

昭和50年頃までは、河口域が曲がり広い干潟や潟湖が点在し、特異的な河口を形成していました。「鵜川」は、アイヌ語で「ムカ・ベツ」と言われ、「川尻が常に動く」という意味をもち、古くから河口の形が変化しながらも干潟が自然に維持されてきた場所でした。しかしながら、近隣の港湾建設などにより海岸線の浸食が著しくなり、この20年間で海岸線が400mも後退し干潟がすっかり少なくなっていました。このままでは河口が直線状になり、干潟が消滅の危機にあるといえます。

このような中、今、鵜川町では、北海道開発局と鵜川町が主体となり「河口懇談会」が7回にわたり開催されています。メンバーはウトナイ湖サンクチュアリー・葉山レンジャーをはじめ、地元鳥獣保護委員、漁協・役場・開発局関係者など13名で構成されています。河口保全のあり方や海岸浸食の問題などを、現況調査報告などを通し話し合いされています。現在のところ、将来に向け具体的な方策までは見出されていませんが、本懇談会の経過が新聞や町報（連載）に掲載され、鵜川町民に対し干潟やシギ・チドリの存在を広くアピールしています。まずはこの宝物を町民に知ってもらうことが重要で、一歩前進かと思えます。

また、平成10年9月には、河口付近152haが北海道鳥獣保護区に指定されました。環境庁所管の特別鳥獣保護区ではなく、指定面積もけって広くはないのですが、狩猟が規制されるなど今後の展開の基礎がためになっていると思われま

さらに、現在、「東アジア・オーストラリア地域シギ・チドリ類湿地ネットワーク」という国際的なネットワークに名乗りを上げようとしている段階です。昨年の夏から秋にかけ、私たち地元自然愛好会で2～3日おきにシギ・チドリのカウント調査を行い、「メダイチドリ」で登録のための基準をパスすることができました。そして昨年末には鵜川町及び議会へ本ネットワーク登録に向けての「要望書」を提出し、現在関係機関で前向きに検討をして載っている状況です。

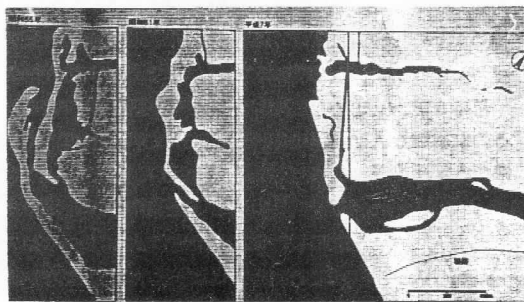
本国際ネットワークは、1996年のラムサール・ブリスベン会議で、日本とオーストラリア政府が共同提案し設立されたもので、10カ国24地域が登録されています。国内では千葉県谷津干潟と徳島県吉野川河口が既に登録され、もし鵜川河口が登録されれば、国内で3番目に

なります。ただし、本ネットワークは公的な条約・協定ということではなく、開発に対する規制は一切ありません。反面、地元で受け入れやすい内容といえ、国内外へのPRや鵜川町民・関係機関の意識高揚には多分に効果があると考えています。

危機に瀕する「干潟」に対してやっとなし前進したと言った状況です。しかしながら、干潟（シギ・チドリ）の具体的な保全・復元策は一切ありません。たとえ国際的なネットワークに登録されても、このままでは、あと数年で干潟が消滅しかねません。北海道で数少ない干潟、そして牧草地や湿地など環境の多様性に富む河口を存続させるには、これから多くの課題に立ち向かわなければなりません。

それには、まず海岸線の浸食防止が急務です。潜堤（人工リーフ）施工により養浜というように具体的方策の提示、それを実行する予算が必要です。町の小規模な予算では何も出来ず、国の予算を獲得出来るような強いアピール（発信）を継続していかなければなりません。そして同時に排水溝の問題や草地の活用など野鳥生息環境の保全を核とした河口周辺の構想を、町づくりに組み入れるよう働きかけていかなければなりません。河口を保全・復元するために活動することは山程あります。しかし干潟消滅まで時間がありません。北海道野鳥愛護会の活動成果が多々あり、今それが基礎になっています。さらに各種の情報やデータを蓄積し、声高々に訴えていかなければいけません。鵜川河口を21世紀の子ども達へバトンタッチしていくために、是非、皆さんのご協力をお願いします。

〒054-0051 勇払郡鵜川町文京町1丁目11番地



鵜川河口では、16年間に400mも海岸線が後退し、干潟が著しく減少していました。

都市公園で秋の小鳥の渡りを見る

～札幌市豊平公園にて～

佐藤 ひろみ

鳥を見るために、いきおい、すぐれた地域へ足を運ぶことになってしまいますが、身近に自分のフィールドがあればそれにこしたことはありません。以前に「BIRDER」誌に、公園でも鳥見ができるという記事が載っていましたので、さっそく近所の公園で試してみることにしました。

私がよく散歩する豊平公園は地下鉄東豊線豊平公園駅のすぐそばにあり、住宅地に囲まれた400m×400mくらいの広さの公園です。林業試験場跡地を利用して、庭園や生け垣、樹木の見本園のような造りで、野草園や薔薇園、浅く小さな池などもあります。昨年からは隣接の豊平墓地跡地に体育館を建設中です。

春と違い、秋にはさえずりが聞こえないので、微かな地鳴きに耳をそばだてながら小鳥の姿を捜すこととなります。朝、1～2時間かけて散歩しているうちにだんだん小鳥の姿が目に入るようになってきました。慣れないうちはなかなか見つけられませんが、ちょっとした生け垣や薔薇の花壇の中にウグイスやヤブサメがいることもあり、こんなところを利用して南方へ渡っていくこともあるのかとハッとさせられます。札幌の中央部はもはやコンクリートやアスファルトで敷き詰められ、この公園ですら植栽や芝生ばかりで十分な下草はありません。小鳥が身を隠す場所がないキレイな造りの公園になっているのです。

この公園を利用する渡り鳥の個体数は多くはありません。時間をかけて歩きまわっても、天気次第でカラッポ状態ということもたびたびあります。でも、塵も積もれば…のごとく、およその渡りのシーズンがわかりました。また、ツグミは9月下旬にはもう渡来している…という具合に、初認の記録も敏感にできるようです。

さえずりが聞けないのでムシクイ類などの識別には苦勞します。でも、上面の色や頭中央線の有無、下尾筒の色など、かえってよく観察するようになりました。また、ツグミ類は警戒心が強く、人の姿に反応して、すぐ樹冠部へ姿を隠してしまい、ズィーズィーという声しか聞こえず見極められないことが多々あり、ツグミsp. とまとめて記載しました。

今後は観察日数が不十分で表の空欄が少しあるので、さらに記録をとること、コガラやハシブトガラの識別もしていかなければならないなどと、思っています。

札幌にはまだ、自然緑地や公園があちこちに残っているので、皆さんもご自宅の近くの公園で試してみたいかがでしょうか。意外な発見があるかもしれません。

参考文献

- ・BIRDER 1994 vol. 8 No.11
 - ・「大阪城公園の野鳥」 元山 裕康
- 〒062-0934 札幌市豊平区平岸4条2丁目
3-15 A-205

札幌市豊平公園 <1995年～1998年>

種名	8月			9月			10月			11月			備考
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	
1 ウsp.									○				961024、上空に3羽
2 ハクチョウsp.								○					971015、上空に群れ
3 マガモ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
4 カルガモ				○	○	○	○	○					
5 ヒドリガモ								○					971013
6 オナガガモ						○	○						
7 ハシビロガモ								○					961012
8 トビ			○				○						
9 オオタカ							○						971006
10 ツミ						○							960929
11 ノスリ										○			961107
12 ハイタカ	○			○	○	○	○	○	○		○		
13 ナゴハヤブサ			○	○	○	○							
14 カモメsp.											○		961113、上空に10羽
15 キジバト			○		○	○	○	○	○				
16 アオバト							○	○	○				
17 ドバト	○		○	○	○	○	○	○	○				
18 カッコウsp.	○		○	○	○								
19 ハリオアマツバメ	○												970807
20 アマツバメ	○												
21 アカゲラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

種名	8月			9月			10月			11月			備考
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	
22 コゲラ									○				961022
23 イワツバメ	○												960804
24 キセキレイ			○		○	○	○						
25 ハクセキレイ			○	○	○	○	○		○	○			
26 ヒヨドリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
27 モズ		○	○	○		○	○	○	○				
28 キレンジャク											○		
29 ミソサザイ									○	○	○		
30 コマドリ								○					
31 ノゴマ						○	○	○	○				
32 ルリビタキ								○	○	○	○		
33 ノビタキ								○	○				960922、墓地跡に1羽
34 トラツグミ								○					950930
35 クロツグミ	○	○	○	○	○	○	○	○					
36 アカハラ					○			○	○				
37 シロハラ								○	○				
38 マミチャジナイ					○	○	○	○	○				
39 ツグミ								○	○	○	○		
40 ツグミsp.			○	○	○	○	○	○	○	○	○		
41 ヤブサメ					○	○	○	○	○				
42 ウグイス								○	○	○			
43 メボソムシクイ				○	○	○	○						
44 エゾムシクイ		○	○	○	○								
45 センダイムシクイ	○	○	○	○	○								
46 キクイタダキ								○	○	○			
47 ムシクイsp.				○	○	○	○	○					
48 キビタキ				○	○	○	○						
49 ムギマキ								○	○	○			
50 オオルリ				○	○	○							
51 サメビタキ				○	○	○	○	○					
52 エゾビタキ				○	○	○	○						
53 コサメビタキ	○	○	○	○	○	○	○	○					
54 エナガ									○	○	○		
55 ハシブトガラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
56 コガラ								○			○	○	
57 ヒガラ	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
58 ヤマガラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
59 シジュウカラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
60 ゴジュウカラ				○	○	○	○	○	○	○	○	○	
61 メジロ	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
62 カシラダカ								○	○	○			
63 ミヤマホオジロ									○	○			
64 アオジ	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
65 クロジ									○	○			
66 オオジュリン									○	○			951017
67 アトリ								○	○	○			
68 カワラヒワ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
69 マヒワ								○	○	○	○		
70 ベニヒワ									○	○	○		
71 ギンザンマシコ									○				971029
72 ベニマシコ									○				
73 ウソ										○			
74 イカル									○				981014
75 シメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
76 スズメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
77 コムクドリ				○									
78 ムクドリ				○					○		○		
79 カケス					○	○	○	○	○	○	○	○	
80 ハシボソガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
81 ハシブトガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
95年観察日数					3	7	1	5	7	2	1		
96年観察日数	1	2	1	4	7	9	7	7	10	3	8	1	
97年観察日数	3	3	4	5	6	6	7	10	10	5	7	1	
98年観察日数	6	2	6	10	4	9	9	9	11	5			
合計観察日数	10	7	11	19	20	31	24	31	38	15	16	2	

野鳥記録二題

北山政人

石狩市生振のミヤマガラスの群

冬鳥として主に西日本を中心に渡来し、北海道では道南および利尻、礼文両島で記録があるミヤマガラスを石狩市生振で観察しました。1999年1月3日と4日に群で確認され、最大で36羽を数えました。写真にも撮影されています。観察された場所は平地の農耕地で、付近には人家や防風林が点在している環境です。

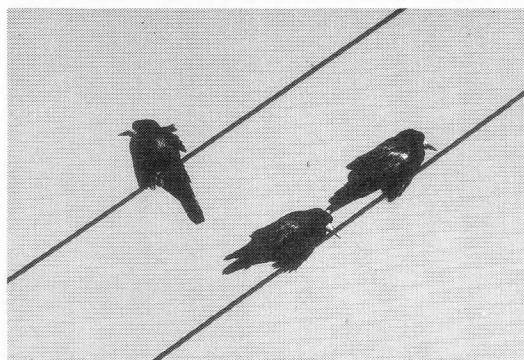
1999年1月3日、愛護会の会員の佐藤幸典さんと石狩市生振を朝から探鳥中の時です。午前10時ごろ、道路沿いの電線と電柱にカラス類が群で並んでとまっているのを見つけました。最初はハシボソガラスと思い込んでいました。ところが、群の真下を乗用車で通り過ぎようとした時、ハシボソガラスではない事に気づいたのです。嘴の根元のあたりが黒くなく白っぽいのです。停車させて双眼鏡でよく見ると明らかに嘴の基部と鼻孔の部分が明るい灰色でした。さらに嘴の形状がハシボソガラスのそれよりも、かなり細く先端もとがっています。実はこのカラス類の群はほとんどがミヤマガラスだったのです。数えてみればミヤマガラスが21羽、ハシボソガラスが2羽でした。21羽のうち嘴の根元に灰白色の皮膚が裸出している成鳥の個体は18羽で、残りの3羽は嘴の根元が黒い羽毛に覆われている若鳥でした。ハシボソガラスやハシボソガラスよりも警戒心が強く、乗用車から外に出た時に絶対に飛ばれない距離だと考えていたのに少し離れた電線の方へ飛んで移動しました。この群は約30分、ほぼ同じ所で休んでいましたが、突然ハシボソガラスと共に飛び去ってしまいました。

すぐに我々は飛び去った方を探す事にしました。実はこの日、ミヤマガラスの群を発見する前に、この場所から2kmと離れていない畑に、ハシボソガラスの群（おそらく100羽前後）が未収穫のトウモロコシに集まっていたのですが、一斉に飛び去るのを見ていました。もしかしたら、あの群の中に彼らがいたのかもしれないと我々は考えて、まず第一にそこに行く事にしました。

畑に戻ると思った通り100羽ぐらゐのカラス類が積雪の中から少し顔をのぞかせているトウモロコシに群れていたり、畑に面している灌木にとまっていたりしています。注意して十分に距離をおいて見ると畑に面している一本の木にとまっている群はミヤマガラスです。畑にも少数がハシボソガラスと共に採餌しています。しかしよく見ていると、ミヤマガラスはなかなかトウモロコシを食べられずにいました。ハシボソガラスの方が優位なのか、常に一定の場所で採餌しています。ミヤマガラスは

ハシボソガラスに追い払われて長い間畑に降りて採餌できず、すぐに木に戻っていました。この時はミヤマガラスを36羽数えました。成鳥が多く、若鳥は5羽前後（採餌のための動きが頻繁なので正確には確認できませんでした。）しかいませんでした。20分ぐらゐこの場所で観察できましたが、再びハシボソガラスと共に一斉に300mぐらゐ離れた防風林の樹上に移動し、両種の混群となり飛び去りました。

この日再び確認したのは午後1時20分ごろです。同じトウモロコシ畑ですが、この時は別の場所を見てまわって来た帰りで、午前中と一変して吹雪になっていました。雪の中、午前中と同じ木にミヤマガラスが24羽とハシボソガラスが数羽、全く動く気配がなくとまっていた。さらにこの群と別のミヤマガラスが9羽、少し離れた電線の上で休んでいるのも確認しています。1月3日に佐藤さんと観察したのは、この時の二つの群が最後です。



ミヤマガラス 撮影 1999.1.3 佐藤 幸典

4日は愛護会の何人かの会員の皆さんが同じ畑や周辺の電線の上にいるのを観察しています。私はこの日は観察に行けなかったのですが、21羽が観察されたそうです。翌日は私も行きましたが、畑や付近の電線には見られず、ハシボソガラスの大群もいません。トウモロコシを食べつくしたのか、あるいは3日の午後からの降雪で完全に食べられる部分が雪の中に埋まってしまったのでしょうか。いずれにしても4日以降は私は生振でミヤマガラスを確認していません。

ミヤマガラスはかつては九州を中心に冬鳥として渡来する鳥と言われてきました。ユーラシア大陸北部のヨーロッパからアジアまで広くで分布し、北で繁殖するものは南へ移動します。日本では近年、限られた地域でしか見られなかったこの鳥が、徐々に越冬地が東日本の方へ北上しているらしく、西日本以外でも各地で観察され始

めているそうです。東北地方でも大群の観察例があるそうです。

北海道におけるミヤマガラスの記録は1994年の4月18日から5月3日まで最大で16羽の群が利尻島で確認されています。また同時期の4月30日にも礼文島で8羽観察されています(利尻研究、第14号、利尻町立博物館年報)。愛護会の樋口孝城さんが、これ以降の記録を利尻の小杉和樹さんに聞いて下さったところ、ここ数年、3月下旬から5月上旬まで利尻島内で数羽から数十羽の群が観察されているそうです。成鳥が少なく若鳥が多いようです。利尻の記録は春の渡りの通過中の観察例と思われる。1996年3月17日には道南の熊石町折戸で愛護会の羽田恭子さん、竹内強さん、道場優さんが約70羽の群を観察されています。ハシボソガラスが数羽、群の中にいて、雪どけの畑で採餌していたり、電線の上で休んでいたそうです。渡りのルートから言えば、日本海側の沿岸部、離島を通過しても不思議ではないと思います。そうなれば、私が観察したのは大陸の方から南下してきた群なのではないでしょうか。いずれにしても石狩地方で厳冬期にミヤマガラスの群が観察された事は珍しい出来事だと思いました。

しかし、この文を書いている時、非常に興味深い情報が入ってきました。今年の1月4日のみですが、ミヤマガラスの群が十勝管内浦幌町養老にて観察されたそうです。確認した日本野鳥の会オホーツク支部の佐藤満さんによるとハシボソガラスと20羽前後の群で11羽(もしくはそれ以上)を数えたとの事です。今後もさらに道内で同時期の観察例の情報が増える可能性があります。

これからはカラス類を注意して見る事にします。再び彼らに会える事を楽しみにしています。(その時はコクマルガラスも一緒に)

〈広報註〉

1999年2月19・20日の2日間にわたり、鶴川町へミヤマガラス約300羽、コクマルガラス白色型2羽、黒色型2羽が渡来し、愛護会とネイチャー研究会inむかわの複数の会員が確認しました。

小樽港のフルマカモメ

1998年12月5日、小樽港南防波堤でフルマカモメを観察しました。フルマカモメはミズナギドリ科に属し、生涯のほとんどを外洋で生活するために海岸ではなかなか見られない鳥なので、港から観察された例は珍しいと思います。同行していた佐藤幸典さんにより写真撮影もされました。

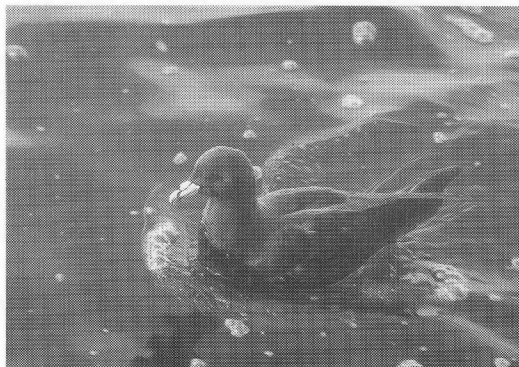
5日の午前8時40分ごろ、小樽港に入る前に平磯崎より、港の外側や朝里方面の海に鳥影を探していた時、南防波堤の外側10mぐらいの海上に見慣れぬ鳥を見つけま

した。フルマカモメではないか、と思ったのですが、この場所からかなり遠かったので、防波堤から観察してから確信を得たかったので南防波堤に移動する事にしました。防波堤の上から見るとフルマカモメの暗色型と確認できました。防波堤に沿って移動し、嘴を海面につけて、さかんに動かしていました。この日、防波堤上には大勢の釣り人がいました。釣り人が捨てた魚のエサを採餌していたのでしょうか。潜水は一度もしませんでした。衰弱して海岸で風に飛ばされた個体ではなく、何度か飛び立ちました。しかし防波堤から離れる事はなく、常に防波堤付近の海面を遊泳して何かを採餌している状態でした。警戒心はあまりないようで、釣り人の真下に浮いている場面も何度かありました。このフルマカモメは一日中同じ場所にいたらしく、午前中は10時ぐらいまで確認して、その後、港の中や祝津方面を探鳥した帰りの午後3時20分に再び同じ場所で同じ行動をしているのを観察しました。翌日、私は小樽に行けなかったのですが、情報を得て南防波堤に行った方の話では、まったくそれらしい鳥はいなかったそうです。

フルマカモメは北半球の寒帯、亜寒帯にかけて繁殖、冬は少し南下し越冬します。日本の近くではサハリン、千島列島などで繁殖します。日本では繁殖例はありませんが、北日本の太平洋沖では一年中見られます。冬季は本州中部の沖まで南下するものもいますが、数は少ないようです。日本海側では夏に北海道北部で見られます。また冬季に南下しているようですが、太平洋側に比べると数は少ないと思われます。

日本海側の沖合の海鳥についての資料が太平洋側のそれと比べると不足していると思います。今回のフルマカモメの観察記録は珍しい例だと思いますが、沖合にはどのくらいの数が生息しているのか不明な点が多い事が現状です。陸地からの観察では限度があり調べるのは大変だと思いますが、海鳥の観察は思いもよらぬ鳥達に会える楽しみがあるので止められないと思いました。

〒063-0802 札幌市西区二十四軒2条6丁目1-31



フルマカモメ 撮影 1998.12.5 佐藤 幸典

「島の鳥たち」

講師 マーク・ブラジルさん

平成11年1月23日、札幌市女性センターにおいて、マーク・ブラジルさんを講師におむかえして新年野鳥講演会が開催されました。マーク・ブラジルさんのご紹介と「島の鳥たち」の講演内容について簡略にお伝えします。

マーク・ブラジルさんはイギリス出身で、昨年4月までニュージーランドに住んでいらっしゃいました。『The Birds of Japan』の著者として高名な方で、日本鳥学会、野生生物学会、哺乳類学会に所属し、現在はBBC、NHKの番組取材協力や英文論文の校閲もされています。この4月からは酪農学園大学で「環境生態学」を講義される予定です。マークさんは子供の頃からバードウォッチングを楽しみ、ダーウィンの『種の起源』を読んだことが、この道に進むきっかけとなったそうです。昨年にはガラパゴスへ行き、念願を果たしたとのことで、この度はそのガラパゴスの他、イギリス、ニュージーランド、フォークランド諸島、南西諸島の鳥たちについて、スライドを供覧しながらご講演くださいました。今、日本語学校に通っていらっしゃるようで、日本語で講演されるのは初めてなので、とてもドキドキしているそうです。

☆☆☆☆☆☆

イギリス……日本と同じ島国ですが、異なる点は氷河期にイギリスの南海岸まで氷河に覆われてしまい、それ以前の生物が生き残っていないことです。その時にヨーロッパから渡ってきた種が現在イギリスにいます。ですから、イギリスにはアカライチョウの亜種を除いて固有種はおらず、鳥として長い間孤立していたにもかかわらず飛べない鳥はほとんどいません。ロビン、クロウタドリが代表的です（以下、供覧したスライドをゴシックで示す）。

ニュージーランド……長い期間、島国として孤立しているので固有種が多いのですが、人間が入植して以来、導入動物が鳥の卵やヒナを食べるため、絶滅した種やそれに近い種が多いのです。そのため環境庁がサンクチュアリーを作っており、そのうちの一つ「ティリテリマタンギ」サンクチュアリーは誰でも入ることができ、絶滅に近い種も見られるのでとてもおもしろい所です。エコトリズムも盛んです。ムカシカゲの一種。キーウィ類の食痕（地面に嘴をつき刺した跡）。ワタリアホウドリ、コビトペンギン、タカハ、マユグロアホウドリなどがいます。

南西諸島……日本の南西諸島はアジアのガラパゴスといわれるほどで、固有種が多いのですが、絶滅に近いもの

もいます。アマミヤマシギ、アカヒゲ、ノグチゲラ、ヤンバルクイナなどがいます。

ガラパゴス……ダーウィンフィンチの仲間は13種いますが、嘴の太さ、エサ、体の大きさがそれぞれ異なります。マネシツグミの仲間はガラパゴスに4種います。砂の中の虫を食べます。カツオドリはアオツラカツオドリ、アオアシカツオドリ、アカアシカツオドリの3種いますが、営巣場所やエサを採る海域が異なり、競合しません。ガラパゴスアホウドリや豊富なエサを泳いでとる飛べないガラパゴスコバネウもいます。ガラパゴスペンギンは昨年エルニーニョで数が半減しました。

フォークランド諸島……鳥の種類は少ないですが、1994年に4回行きました。四国の1/4くらいの面積で、低山の島です。マゼランガン、チャガシラコバシガン、シロコバシガンなど雁3種いました。シロコバシガンはケルプグースともいい、海岸にいて海草を食べます。ミナミゾウアザラシは繁殖のため10月にフォークランドにやってきます。雄同士のテリトリー争いが激しく、傷をおったアザラシの血をなめにやってくる鳥もいます。ジェンツーペンギン、オウサマペンギン、イワトビペンギン、マユグロアホウドリなどが繁殖しています。飛べないフナガモもいます。

日本は島国なので、島の鳥たちを観ることは参考になることと思います。

〔参加者〕尾田和夫、三船幸子、佐藤ひろみ、蒲澤鉄太郎・則子、白澤昌彦、樋口孝城・陽子、温井日出夫・潤子、北山政人、佐藤幸典、栗林宏三、竹中昭雄、山田良造、松原寛直、志田博明、松原敏子、渋谷信六、村野紀雄、大町欽子、野坂英三、小畑淳毅、石橋孝継、榊川保・弘子、佐野由美子、井上公雄、戸津高保・以知子、川上秀幸、新城久、鈴木繁雄、犬飼弘、広木朋子、阿部玲子、栗原哲、佐々木泰夫、早坂泰夫、谷口一芳、板田孝弘、羽田恭子、小堀煌治、山崎カツエ、太丸リツ、清水朋子

お知らせ

雁・白鳥、ワシ類の鉛中毒のシンポジウムと観察会が4月24～25日の両日、美唄市の専修短大と宮島沼で開かれます。講師は小川巖氏、森田正治氏、俵浩三氏ら。

時間など詳細は tel 01266-2-0246 の田辺至氏まで。



ウトナイ湖探鳥会

1998.11. 8

渡辺好子

ハクチョウやオナガガモが36号線から立ち寄りお客さんに愛敬を振りまいていた。ご馳走を頂戴しすこぶる機嫌がよい。ウトナイ湖の微笑ましい秋の風物詩である。

フィールドスコープと長靴姿のうれしい探鳥会ルックの「愛護会」に合流する。

ヒシクイの集団が向こうに見える。はやりの茶髪頭のヒドリガモもオナガガモに混じって遊んでいる。雄は口笛のような鳴声だというのが今日も聞かずじまい。

今年のマユミは春から淋しげな色をしていたが実になっても小さいし色褪せている。カケスが飛びかっている。

樋口さんがオカヨシガモがいるとスコープを覗かせてくれた。黒い尻尾までも鮮明に見える。山田さんが上には上があるもんだ、とそのスワロフスキーズーム60倍の凄い兵器を讚える。

自然界の厳しさも垣間見せられる。ハクチョウが無残な姿をさらしていた。思わず顔をそむけた。

対岸に豆粒のようにオジロワシが見える。表情は見えないが私の双眼鏡でも孤高の貫禄が漂っている。ゆっくりと舞い上がった。と300羽程のヒシクイが一斉に南を向いて飛びたつた。先日西岡水源地で見たカワアイサもいる。見慣れた潜りガモに訳もなくうれしくなる。

道端にはエゾノコンギクが厳しい冬を前に清楚に咲いている。小さなエゾノコリンゴの真っ赤な実が可愛い。ツルウメモドキが枯色の野に華やいでいる。名所は健在。

ネイチャーセンターに駆け込み「あおさぎ」の最新No.98号を手取る。表紙のhibariさんのやさしいシルエットの絵とあきのさんの心を込めた美しい詩が大好き。

うん円也のカンパを箱に入れる。私の心も「まっすぐポッカリ 浮いてきた」。

帰る途中のぬかるみに油が浮いていた。「どうしてこんなところに油なんか」と聞いた相手のお方が悪かった。富田さんだった。「今日の感想文を」と。

帰路若小牧北大演習林に寄った。コウリンタンポポがまだ咲いていた。なんとトゲナシボケも赤い花を付けている。マンサクまでもが今にも咲きそうな大きい蕾を付けている。札幌の10月平均気温は観測史上最高だったという。今日も18度はあろう。思いもよらない美しいものを見た喜びも、不気味な自然界の異変が気になって仕方

がない。

カイツブリが3羽並んで潜った。

〔記録された鳥〕カイツブリ、トビ、オジロワシ、チュウビ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、オカヨシガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、カワアイサ、アカゲラ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上28種

〔参加者〕逸見トモ子、蒲澤鉄太郎・則子、川上秀幸、中正憲信・弘子、渡辺吉宗・好子、高栗 勇、秋田和子、山本やす子、松原寛直・敏子、小堀煌治、板田孝弘、沢部 勝、西根昭吉・紀子、富田寿一、雪田昭治・久子、大橋ミツエ、戸津高保・以知子、樋口孝城、山田良造、後藤義民、鈴木繁雄・英子、井川修二、成澤里美、加藤花子 以上32名

〔担当幹事〕富田寿一、戸津高保

「小樽港～祝津港探鳥会」報告

1998.12.13 岩瀬 操

冬型の気圧も弱まり、穏やかな日和に恵まれた一日でした。昨日の土曜日に簡単に下見をしました。数が少なかったので今日はどうだろうかと思いつつ小樽駅に到着。懐かしい人達と再会しました。

札幌の人達も到着、バス2台に分乗し祝津の高島岬にある日和山燈台へ向かいました。眼下に「トド岩」を眺める位置からウォッチング開始です。断崖絶壁の縁ぎりぎりまで足を進めていますので、転落事故を起こさないか大いに心配です。私も崖の方へ行こうとすると、「そっちは駄目」、「ウンチ。ウンチ。」という声に足元を見ると、犬のものらしい糞のかたまりがありました（野性の狸・狐は、縄張りを主張するためか所にまとめて落とさない）。踏まれた形跡が有りませんでしたので、運のいい人はいなかったと思いながら、落とす物を崖下に捨て魚の餌にしました。小樽水族館の上、「トド岩」を眺める位置からは、オオセグロカモメ、ウミウ、シロカモメ、シノリガモ、ヒメウも見ることができ、「トド岩」の上には、多数のオオセグロカモメやウミウが休んでおりました。水族館の方からはトドの吼え声が聞こえていました。オオセグロカモメやウミウも高台から見下ろすこととなりますので、飛んでいる背中を観察できます。

「ウミガラスがいる」という声が聞こえました。さすが〇〇さんです。相当沖合にたった一羽いるのを見つけたのです。喉が白くなった冬羽です。波の間に間に見え隠れしていました。

我々が観察している崖の上は、海面上約40メートルで

す。水平線までの距離、つまりどれくらいまで見ることが出来るかということですが、

$\sqrt{H} \times 3.837 \text{ km}$ H: 海面からの目の高さ(眼高) $\sqrt{40} = 6.324555$ $\times 3.837 = 24.267 \text{ km}$ 40 $\sqrt{\text{cm}}$ を当てはめれば約24.26 $\sqrt{\text{km}}$ となります。概ね24キロ先まで見えるということです。海の上は比較する物が無いので、近くに見えますが、以外と遠いということを知っておいてください。〇〇 $\sqrt{\text{cm}}$ と判断した距離を倍にすればよいでしょう。小樽水族館の沖にある「トド岩」まで、いつも観察する場所から何メートルあるでしょうか。

日と山燈台下に移動し、北から東の海上を観察することにしました。

オオセグロカモメとウミウばかりで、他は見当たりません。しばらくすると、ウミガラス、マダラウミスズメという声がありました。東の海上のそう遠くない海面に双眼鏡で見つけました。しかしながら、双眼鏡では遠すぎて何やら特定できません。望遠鏡を拝借し覗いたらウミスズメかマダラウミスズメのように見えたのですが、眼の周囲に白いリングがあり、ケイマフリのような気がしました。特徴の赤い足が見えれば間違いなくケイマフリなのですが、足は黒かったという人もおり、確定し兼ねましたが、嘴が黒っぽくかつ頭と比べて半分を越えた長さがあり、ウミスズメと違うこと、頭から嘴にかけて丸みがあることからマダラウミスズメとも違うと判断し、ケイマフリと思いました。こんな事もあり観察時間をオーバーしてしまったようです。昼食場所であるフェリー埠頭に向かいました。久しぶりにラーメンを食べながら飲んだ生ビールは美味しかった。

食事が終わったあとコオリガモの♂がいるという声、眼の数が多いということは有り難いことです。今日は声を頼りにうろろろしています。

コオリガモの♂が1羽、体全体が白っぽく、黒いほっぺのおてもやん、ピンと延びた尻尾が特徴です。その周りにはカモメがいました。ただのカモメですが、久しぶりに十分に観察できました。

次に訪れたのは、貯木場で、スズガモが目的です。スズガモの他にシノリガモ・コガモ・オオセグロカモメ・ウミウ・ワシカモメを見ることができました。近くの築港ヤード跡地では大型商業施設の建設が進んでいます。カモ達にとって明るい話題か暗い話題か間もなく分かるでしょう。

次に訪れたのは、中央埠頭の北側で、ホオジロガモを車中から観察し、北浜岸壁に向かいました。数百羽のホオジロガモがいました。不思議なことは♂が圧倒的に多いことです。♀が多いグループが有るのでしょうか。

鳥を始めこの地球上の素晴らしい生き物達と人との関わりを思うとき、生きるものを大切にしたいと思ひ

ます。

今日は天気に恵まれ、快適なウォッチングでした。お世話下さった幹事の皆様、有り難うございました。

(答: トド岩まで約500 $\sqrt{\text{cm}}$)

(日本野鳥の会 小樽支部会員)

[記録された鳥] ピロードキンクロ、カケス、ウミウ、ヒメウ、ウミアイサ、ウミガラス、オオハム、オオセグロカモメ、ウミネコ、カモメ、シロカモメ、ワシカモメ、セグロカモメ、コオリガモ、シノリガモ、ホオジロガモ、ムクドリ、スズメ、ヒヨドリ、ハヤブサ、ハジロカイツブリ、ハシブトガラス、ハクセキレイ、ドバト、トビ、スズガモ、シジュウカラ、コガモ、ケイマフリ、ハシボソガラス 以上30種

[参加者] 東美由起、秋田和子、青江 正、五十嵐美保、石橋和子、上原重男・重之・茂世・裕世、江尻真喜子、小川秀子、大町欽子、井川修二、伊藤恭子、伊藤聖子、坂田孝弘、加藤花子、栗林宏三、河野美智子、小堀煌治、小須田秀子、佐藤ひろみ、佐藤幸典、白澤昌彦、鈴木繁雄・英子、谷口一芳、高栗 勇、道場信子、戸津高保・以知子、西川喜久子、羽田恭子、橋爪陽子、樋口孝城、松本美智子、村上トヨ、山田としえ、山田美子、山田良造、山本昌子、渡辺好子、竹内 強 以上43名

[担当幹事] 白澤昌彦、栗林宏三、佐藤ひろみ

白ちょう園にさんかして

1999. 1. 17 にしもと あや(藻岩小2年)

わたしは、1月17日白ちょう園のたんちょう会にさんかしました。わたしがたんちょう会にさんかしたのは3回目です。お天気がとてもよかったので、アカゲラとヒヨドリとカケスとミヤマホオジロとシジュウカラとヤマガラとスズメとゴジュウカラとハシブトガラとエナガを見ることができました。とてもきれいでした。

それから、みんなで歩いて、ふじのさわ小学校にいきました。とちゅう、オカバルシ川のガケにヤマセミなどの巣を見て、やちょうの会のおじさんのせつめいをききました。

ふじのさわ小学校には、ボタンをおすと、とりのなき声がきけるてんじがあつて、おもしろかったです。わたしの学校はそういうのはありません。

それから、白ちょう園にもどつて、ブタ汁とつけものとおにぎりをみんなでたべました。ブタ汁がおいしくておかわりをしました。

カケスが7羽もきて、パンをとりあつてケンカしていました。

それからみんなでチェックリストでとりあわせをしました。今日は、とてもおもしろかったです。またさんか

したいです。

〔記録された鳥〕アカゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、シメ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ミヤマホオジロ 以上15種

〔参加者〕小堀煌治、三船幸子、遠藤尹希子、樋口孝城・陽子、今泉秀吉、久田伸一、蒲澤鉄太郎、佐々木裕、佐々木政子、栗林宏三、大町欽子、加藤花子、秋田和子、渡辺好子、西本文、西本みちえ、西本肇、戸津高保・以知子、横井澄子、以上21名

〔担当幹事〕小堀煌治、三船幸子

野幌森林公園

1999.2.7 勝見輝夫

野幌森林公園には、歩くスキーで、こししばらくの間に何回か遊びに来ていました。スキーの合間に時折鳥のさえずりを聞くことがありましたが、姿を見つけることが出来なくて、又種類も判らずにいました。

庭に野鳥が数多く来て、ナナカマドの実をついばむ光景を見ながら、名前や生態を知りたいと思っていた時に、今回の行事を知り、ドギマギしながら妻と参加しました。ベテランの方に野鳥の居る場所を失礼とは思いつつも何回も何回も教えて頂き恐縮しながら色鮮やかなアカゲラ、コゲラ、ハシブトガラ、初めて見るキクイタダキを見つけた時は、何とも言えない感激を味わいました。

会の終りに今日確認された鳥の名前が発表されましたが、聞きなれない名前が多くて、次回参加の折には、双眼鏡の使い方や野鳥の名前をもう少し調べておきたいと考えております。

〔記録された鳥〕コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、キレンジャク、ヒレンジャク、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、ウソ、ハシブトガラス 以上13種

〔参加者〕下野一男・れい子、鈴木勇、酒井得子、勝見輝夫・真知子、橋本しづ子、内川雄平、広木朋子、鈴木繁雄・英子、今村三枝子、内田孝、村上トヨ、石井裕子、横井澄子、佐藤肇、後藤義民、井上公雄、久保田喜代美、戸津高保・以知子 以上22名

〔担当幹事〕戸津高保、井上公雄

オシドリ観察記録を募集しています

観察した場所、年月日、性別と個体数をお知らせ下さい。宛先は、郵便：080-8555 帯広市稲田町帯広畜産大学 藤巻裕蔵まで。

ファックス：0155-49-5504

E-mail：fujimaki@obihiro.ac.jp

鳥民だより

◆総会のご案内

平成11年度の総会を次のとおり開催いたします。多数ご参加ください。

日時：平成11年4月17日(土) 午後1時30分から

場所：札幌市民会館2号室

議題：平成10年度事業報告、同会計報告

平成11年度事業計画、同予算案 他

◆野鳥写真展の開催と写真募集

日時：平成11年4月27日(火)～5月16日(日)

場所：光映堂ギャラリー

札幌市中央区大通西4丁目

TEL011-261-0101

展示は4月26日、搬出は5月17日。出展ご希望の方は、写真をご用意下さい。また会の主旨により営巣写真はご遠慮願います。

写真送付は光映堂の青山さん(住所は上記)まで。

◆平成10年度会費納入についてお願い

平成10年度会費を未納の方は、郵便振替にて至急振り込みくださいますようお願いいたします。

◆会員住所変更のお知らせ(敬称略)

井上公雄・則子 札幌市白石区南郷14丁目

南3-1-1308

道場 優 札幌市北区百合が原4丁目7番1号

今村 三枝子 札幌市白石区東札幌6条3丁目

1-2 2-311

○会報の宛先等に変更がありましたら、至急ハガキにて事務所までご連絡ください。

◆114号の訂正とお詫び

○表紙撮影者のお名前が間違っておりました。訂正してお詫びいたします。

〔誤〕川上秀年 ⇨〔正〕川上秀幸

○宮島沼にアカツクシガモの記事の中で、「雄の幼鳥の可能性もあり、」を削除させていただきます。

◆ホームページ作成を検討中!

協力して下さる方を求めています。

連絡先は富川さんまで。

◆野鳥だよりの原稿・イラスト・写真などの募集

探鳥会案内、バードテーブルの鳥、フィールドの野鳥観察記録、野鳥の詩などなど野鳥に関すること何でも歓迎です。おもしろい角度で撮った野鳥の写真をお持ちの方はいらっしやいませんか。ぜひ御投稿ください。

探鳥会案内

4 月	
4日(日)	野幌森林公園を歩きましょう 大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分 カラ類の澄んださえずりが響くなか、残雪の森林公園を歩きます。
11日(日)	野幌森林公園 大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分 渡り鳥が交代する時季です。冬鳥が去り、そろそろ夏鳥のさえずりが始まります。
18日(日)	宮島沼 大富会館前 午前10時集合
	中央バス(月形行) JR岩見沢駅前バスターミナル発 大富農協前下車 徒歩10分 北へ向かうマガンが集結し、編隊を組んで沼と採餌場を歩き来しています。
5 月	
2日(日)	野幌森林公園 大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分 鳥たちの恋の季節の到来です。美しい歌声に耳を傾けましょう。
9日(日)	千歳川周辺 千歳孵化場手前の橋の側、河川敷公園駐車場 午前5時集合 (早朝のため、公共交通機関はありません。)
	溪流に住むヤマセミ、カワガラス。水辺の鳥や森林・草原の鳥など、観察記録は多彩です。
16日(日)	鶴川 JR日高本線 鶴川駅前 午前9時40分集合
	道南バス(浦河行) 札幌駅前バスターミナル8時発 鶴川農協前下車 徒歩5分 牧場を通り抜け、鶴川の河口へ向かいます。シギやチドリに会いたくて。
23日(日)	野幌森林公園を歩きましょう 大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分 鳥たちが最もにぎわいを見せる新緑の季節。あちこちに現れて目移りして困ってしまうかも。
6 月	
6日(日)	植苗・ウトナイ湖畔 JR千歳線 植苗駅前 午前9時10分集合
	JR千歳線(苫小牧行) 札幌駅7時55分発 植苗駅下車 草原に立ち、風に乗って聞こえてくる鳥たちのさえずりを捕らえ、彼らの姿を探しましょう。
13日(日)	東米里 東米里小学校正門前 午前8時30分集合
	市営バス(白7米里線) 地下鉄菊水駅発 東米里小学校前下車 札幌近郊に残された、草原の鳥の穴場です。今年もカッコウは健在でしょうか。
19日(土)	平和の滝(夜の探鳥会) 平和の滝駐車場 午後6時30分集合
	市営バス(西42西野平和線) 地下鉄発寒南駅発 平和の滝入口(終点)下車 徒歩20分 ヨタカ、コノハズク、ヤマシギ…。夜だからこそ、声の探鳥です。
27日(日)	野幌森林公園を歩きましょう 大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分 鳥たちは子育ての真っ最中です。親子連れで現れるかもしれません。

☆探鳥会は、探鳥幹事を中心に行います。

野幌森林公園を歩きましょうの場合は、集まった方の中からリーダーを立てて行きます。

☆余程の悪天候でない限り行きます。

☆公共交通機関を利用される方は各自でお確かめください。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具をお持ちください。

☆探鳥会の問い合わせ

自然保護協会事務所 011-251-5465 午前10時～午後4時(土・日・祭日を除く)

[北海道野鳥愛護会]年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465